

第27回 大好き いばらき 作文コンクール 茨城県教育委員会教育長賞

3年 長井 綾乃 『支えられて、今』

私が茨城に来たのは、4歳の時でした。それまでは、千葉の児童養護施設で生活していました。私と兄を引き取ってくれたのは、祖母の姉で、私の大叔母さんにあたる方と、そのご家族でした。大叔母さんの家が茨城にあると聞いた時、わざわざ千葉まで私と兄を迎えに来てくれたのかと、とても驚きました。そして、そのことがとても嬉しかったです。

大叔母さんの家に行くと、私に兄姉が増えました。兄が1人から3人に増え、姉ができました。施設にいたときも、一緒に生活している皆が家族のようだったので寂しいなどとは思っていませんでしたが、その施設でお姉さんのような立場だった私は、自分が甘えても良い存在ができたことがとても嬉しかったです。そして、大叔母さんに、

「私達のことは家族だと思って、私達を、お母さん、お父さん、お兄ちゃん、お姉ちゃんと呼んでね。」

と言われて初めて、私に家族ができたのだと実感することができました。父の顔も知らず、母のこともうろ覚えで、暖かい思い出が何一つ無い私には、普通の家庭など、夢ではないかと疑ってしまいました。恥ずかしい気持ちと不安が混じって、その場ではお母さんお父さんとは呼べませんでした。一緒に暮らしているうちに、自然と呼ぶようになりました。

茨城に来て、自然豊かな光景が、とても印象的でした。それまでは、あまり自然に触れる機会が無かったので尚更でした。家の近くに何本も生えている、梅の花がとても綺麗で、幼かった私は、毎年見ているだろう母に、梅の花がどんなに素敵か、一生懸命語っていました。すると母が、丁度時期だから、と言って、私を偕楽園に連れていってくれました。偕楽園では、梅まつりを開催していて、沢山の人で溢れかえっていました。その、初めて見る人の多さに最初は驚きましたが、慣れてくると、母の手を引いてあちこちと見て回りました。私が一番気に入ったのは、見晴らし広場から見る沢山の梅と千波湖です。上から梅を見ることはなかなかないので、とても珍しく思いました。こんな素敵な所に連れてきてもらえて、とても嬉しかったです。

梅の時期も終わり、幼稚園が始まる時期になりました。家族には慣れて来てはいましたが、家の外となるとまた別で、知っている人のいない環境はやはり、不安で仕方なかったです。スクールバスの地区集合場所に行くと、皆仲が良さそうで、話しかけても大丈夫なのか分からず、結局そこでは誰とも話せませんでした。もう少し積極的に行くべきだったかと落胆しながらバスに乗ると、隣に女の子が座ってきて驚きました。その子は集合場所

にいた子でした。驚きで固まってる私に自己紹介をしはじめ、よろしく、と言われたので、吃りながらも私も自己紹介をしました。その日から、その子と行動を共にすることが多くなりました。園に慣れて、友人が増えても、バスを待つ時間やバスの中で遊んだりしていました。小学校も中学校も一緒に、クラスも部活も別々だったけれど、帰りは自然と一緒にすることが多かったです。他の友人と話す時は少なからず気を遣うこともあって、1人になりたいと思うことがあるけれど、その子と一緒にいる時は、何故か疲れたりせず、むしろ安心感を得ることが多々ありました。無理をしなくてもいい存在だったので、別々の高校に進学することが決まって、会う機会が少なくなることに、とても不安を覚えました。親にも相談できないことや些細なことまで話せていた相手がいなくなるのは、私にとっては目隠しをして綱渡りをするようなものだったからです。支えが無いと立てない程弱くはないつもりですが、信頼できる人と離れて、知らない人だらけの高校に通うことに、不安と焦りがありました。ですが、今度は自分から話しかけることができました。その子は明るく社交的な性格の子で話しやすく、お互いに知り合いがいないという、心細い状況だったこともあり、すぐに打ちとけることができました。心に少し余裕ができると、周りを見ることができるようになりました。校内の雰囲気も良く、先生方も丁寧に接してくださるので、学校はとても良い環境でした。そして城里町も自然が沢山あり、のどかな風景がとても心癒やされるものだということにも気付くことができ、この高校に入学して本当に良かったと心から思いました。幼稚園からの友人とは今でもお互いの悩みを打ちあけあったり、他愛の無い話で盛り上がったりしています。私が今こうして笑ってられるのも、茨城で引き取ってくれた母のおかげだと思っているので、就職したら、家から会社まで通いながら、身体の悪い母を支えたいと思っています。